

降格課長、元部下の課長に人事の紙で
押さえられ、机の下で啜えさせられ面
談室でナカに出される

2026

•

10

•

8

目次

第1話 課長代理の夜

第2話 評定の欄

第1話 課長代理の夜

「粕谷さん。面談室。見積は置いというて」

内線は、返事を待たずに切れた。

粕谷晃嗣は受話器を戻して、打ちかけの見積を保存した。

月曜の夜、八時すぎ。

営業二課のフロアに残っているのは、粕谷と、窓際の課長席の織田笙真だけだ。

「粕谷さん、コピー機の紙詰まり、直しとききました。見積を差し戻されなきゃ、定時に出てたんすけどね。お先です」

樋口航平が袖をまくったまま鞆を肩に掛け、粕谷の机の飴を一つ、断りもなく口に放りこんで出ていった。

「おう。お疲れ」

廊下で、総務の安西の声がしている。

「丸山さん、脚立どこやった。面談室の蛍光灯、明日替えるんだ。ちらついてんだよ、あそこ」

守衛の丸山が大きな声で何か答えて、ラジオの音と一緒に遠ざかった。

粕谷は立って、上着の前を留めた。

課長だった頃に誂えたスーツは、肩と胸がきつい。

——降りて二週間だ。まだ腹が立つ。

課長席から織田が出てきて、先に廊下を歩いていく。

粕谷より頭半分低く、胴の厚みは半分ほどしかない背中だ。

先月まで粕谷の後ろを歩いていた背中が、今は前にある。

面談室は二階の奥で、窓がない。

蛍光灯が一本、ちらついている。

織田は粕谷を先に入れて、後ろ手に鍵を回した。

かちや。

「座んなくていいよ。椅子は使わないから」

織田は内ポケットから紙を一枚出して、机に置いた。

「業務命令。読んで」

『業務上の必要により、今週は二十二時まで残業とする。作業は単独で行う。退出の際は課長へ内線で断ること』

「……見積の点検に、一週間も要らねえだろ」

「要らないね。あんたの見積、直す所がないもん。隣で見てて、一回もなかった」

織田は紙を伏せて、机に浅く腰をかけた。

そうやって座ると、織田の目は、立っている粕谷の胸のあたりに来る。

「残業の中身は、俺が決める」

じ、とファスナーの下りる音がした。

織田は自分で下着をずらして、ちんぽを出した。

もう硬い。

長くて、上に反って、亀頭の張りが大きい。

「握手、得意だろ。あんたの手で客が黙るの、隣でずっと見てた」

「……織田課長。その紙の『作業』ってのは、これのことか」

「そう。紙は人事に見せるほう。こっちは、俺とあんたのほう」

冗談を言う顔ではなかった。

粕谷は右の拳を握って、ひらいた。

殴れば、明日から客の前に立てなくなる。

——手を汚すほうが、まだましだ。

「洗ってあるんだろうな」

「昼に小便を一回。確かめる？ 鼻で」

「鼻が曲がる」

粕谷は一步出て、右手を伸ばした。

握った。

指を回しても、亀頭が掌の上へはみ出す。

硬くて、掌の中でどく、どくと脈を打っている。

「……っ、は。でかい手。皮、厚いな。何でこうなるの」

「鞆だ。新人の頃から提げてりゃ、誰でもこうなる」

「ざらざらする。……いいよ、それ。そのまま上まで」

粕谷は付け根から亀頭のくびれまで、掌を一度だけ滑らせた。

乾いた皮が引きつれて、織田が腰を引いた。

「痛い痛い。乾いてんだよ。唾」

「は？」

「唾。あんたの。掌に吐いて」

織田は顎で、粕谷の右手を指した。

「……明日、客に出す手だぞ、これは」

「早く。乾いたまま擦られたら、俺の皮がむける」

粕谷は自分の右の掌に、唾を落とした。

ぺっ。

粕谷は自分の唾を、自分の掌で、織田のちんぽに塗りつけた。

ぬる、と今度は滑った。

「そう。……ふ、ッ。強い強い、潰す気か。指が太いんだからさ、輪っかにしないでいい。掌で包んで」

「注文が多いな」

「言うよ。もっと上。亀頭の下、親指で。爪は立てるなよ。腹のところで、くるくる」

粕谷は言われた所へ親指の腹を当てた。

くちゅ。

くちゅ、くちゅ。

唾と、亀頭の割れ目から出てきた我慢汁が混ざって、手の中で音が立つ。

見ていられなくて、粕谷は顔を壁へ向けた。

「顔。こっち」

織田の右手が粕谷の顎を掴んで、正面へ戻した。

夕方の青いひげが、織田の指の腹でじより、と鳴った。

「人の顔を見ながら扱く趣味はねえ」

「目をつぶってても出来てるよ。上手いもん、あんた。自分のをやり慣れてる手だ」

「……ッ、汁を拭け。俺の親指に、垂れてる」

織田の亀頭の割れ目から、我慢汁が玉になって、粕谷の親指へ垂れた。

「やだね。それで滑ってるんだろ。それに喋ってないと、すぐ出そうなんだ。あんたの手、ざらざらして、ぬるぬるで、ずるいよ」

「そっちも、垂らしてるじゃねえか。机に落ちるぞ」

「待ってた手だぞ。こぼれもするよ」

粕谷の手が、一拍だけ遅れた。

「……上着の前、開けて。腹が隠れてて、つまんない」

「注文の次は、服か」

「ボタンだけ。脱げとは言っていない」

粕谷は左手で、上着のボタンを外した。

前がひらくと、きついシャツが胸に貼りついているのが丸見えになる。

「胸、厚いな。ボタンが泣いてる。……いいよ、手、続けて」

織田は顎から手を放して、机の縁に両手をついた。

ことん、と床で音がした。

織田が右の革靴を、踵から蹴って脱いだ音だ。

靴下の足が上がってきて、足の裏が、粕谷のスラックスの前にペたりと当たった。

「……靴を脱ぐな。客先の座敷でも汚る男が」

「暇なんだよ、こっちの足。あんたは手、止めんな。俺のを忘れんなよ」

土踏まずが、スラックスの上からゆっくり上下に動いた。

粕谷のちんぽは下着の中で、皮を半分かぶったまま、左の腿に寝ている。

その形を、足の裏が布ごとなぞっていく。

「お、いた。太いな。……柔らかいうちから重いよ、これ」

「足を、どけろ。折り目が潰れる」

「もう遅いよ。中のが起きてきた」

足の裏が、竿を腹のほうへぐつと押した。

「ッ、ふ」

鼻から息が抜けた。

踏まれて、押されて、竿に血が入っていく。

粕谷のちんぽは起きても上へ反らない。

真っ直ぐ前へ出るから、スラックスの前を内側から突いて、織田の土踏まずを布ごと押し返した。

「うわ、押し返してきた。硬い。靴下で踏んでるだけなのに」

「……机に、座るな、ッ。客も、肘をつく、机だ」

「手。止まってる」

粕谷は歯を噛んで、右手を動かした。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

織田のちんぽを扱く音が速くなると、足の裏も同じ速さでスラックスを擦る。

ずり、ずり。

布の中で皮がめくれて、裸になった亀頭が下着の内側に擦れた。

「んゝ」

「今の、どこから出たの。喉？ 鼻？」

「喉だ。……ッ、文句があるなら、足を洗ってから来い」

織田は足を止めもしなかった。

「はは、ッ。朝、風呂に入ったよ。あんたの膝、さっきから俺の脛に当たってる。震えてんの」

織田の足の指がひらいて、親指と人差し指の股で、亀頭を布ごと挟んだ。

きゅ、と締められる。

「ぐ、ッ」

「丸いな、先っぽ。指で挟める。……あ、靴下、濡れた。あんたの汁、スラックスを抜けてきてる。多くない？」

「安い靴下を、ッ、履いてるからだ。水を、吸わねえ」

織田は声を出して笑った。

「はは、ッ。三足千円だよ、悪かったな」

笑いながら、今度は踵を使ってくる。

踵が股の下へ潜って、金玉を下からぐい、と持ち上げる。

「うゝ」

「重い。踵に乗る。……くく、ッ、ずっしり。何を溜めてんの、ここに」

「足癖の、悪い、ッ、課長だな……ふ、ッ」

踵の上で、金玉がごろ、と転がされた。

「足だけじゃ足りないな。手も使う」

織田は左手を机から離して、粕谷の腰の後ろへ回した。

スラックスの上から、右の尻たぶを掴まれる。

指が食いこんで、粕谷の腰は半歩、前へ引き寄せられた。

「尻もでかい。硬いな。……スラックス、ぱんぱんだ」

「どこを、掴んでる。離せ、ッ、仕立てが伸びる」

「あんたの尻が勝ってるよ、布に。縫い目が悲鳴あげてる」

寄せられたぶん、足の裏が強く当たった。

土踏ましが竿を腹へ押しつけて、付け根から亀頭まで、ずり、ずり、と擦り上げる。

粕谷の手の中では、織田のちんぽが我慢汁でぬるぬるになっていく。

くちゅ、ぬちゅ、くちゅ。

「今日の客さ」

織田は机の上で腰を揺すりながら続けた。

「見積を開く前に言うんだよ。『前の課長さんは端数を切ってくれた』って。あんた、どこでも切ってたの」

「逆だ、ツ。最初から、乗せとくんのだ。……ふ、ツ、客に、引かせてやる分を」

「は、ツ。それ、俺は教わってないな」

織田の左手が、尻たぶをぎゅっと握り直した。

「聞かれなかった」

「『見て盗め』が口癖だったろ、あんた。……だから今、盗んでる。顔、こっちだって」

また顎が戻された。

織田は粕谷の顔を、下から覗きこんでいる。

額に汗が浮いているのも、鼻の穴が広がっているのも、全部見られてる。

——腹が立つ。それなのに、腰が逃げない。

「耳、赤い。首まで赤いよ。あんた、足で踏まれるところなるんだ」

「顔色は、ツ、口に出すな。腹で読め。……そう、教えた、ろうが」

「顔に書いてあるのを音読してるんだよ。……手。俺のが留守だ」

足の裏が、わざとゆっくり竿を撫で上げた。

「なら、足を、止めろ、ツ、ぐ」

「やだ。面白いもん。あんたの眉が、踏むたびに寄るんだ」

足の指がまた亀頭を挟んで、今度は左右にこね回した。

下着の中はもう我慢汁でぐしょぐしょで、こねられるたびに、ぬち、ぬち、と布の中から音がする。

灰色のスラックスの前に、黒い染みが丸く浮いていた。

その染みの真ん中を、織田の足の親指がぐり、と押す。

「ッ、ふ、……っ、く」

「ここだ。先っぽの割れ目。押すと、じわって出てくる。靴下がべとべと」

「言う、な、ッ、そういう、事を」

濡れた足の親指が、染みの上で円を描いた。

「見えてるんだから仕方ないだろ。……手。また止まってる」

粕谷の右手は、もう織田のちんぽを握っているだけになっていた。

「あ、腰が来た。自分で擦ってる。俺の足の裏に、ちんぽ、ぐいぐい押しつけて」

「……くそ、ッ、その、靴下が、ッ、ふん」

「靴下に当たるなよ。ふは、ッ。ほら、もっと腰。尻、俺の手に預けて」

尻たぶを掴んだ左手が、粕谷の腰を足の裏へ、ぐい、ぐい、と引いた。

「ぐ、ッ、……引くな、ッ、布が、亀頭に、食いこむ」

「わざとだよ。くびれの所、指の股に嵌まつてる。……太いな、ほんとに」

織田は笑いながら、土踏まずを速く上下させた。

ずり、ずり、ずり、ずり。

踵が金玉を押し上げて、指の股が亀頭を絞る。

腿の内側が攣りそうになって、粕谷の膝がかくんと折れかけた。

「待て、足、ッ、止めろ、出る、だろうが、」

「いいよ、そのまま。靴下の足に踏まれて」

「スラックスの、中だぞ、ッ、ぐ、……ん、」

織田は笑って、粕谷の尻を自分のほうへ引きつけた。

「だからいいんだろ。その中に、全部」

亀頭を、足の裏が腹へ押しつぶした。

「うゝッ」

びゆく、と下着の中で跳ねた。

びゆく、びゆる、びゆく。

熱いザーメンが下着の中に広がって、行き場がなくて、竿と布の間を這い回る。

左の腿を伝って、垂れた金玉を濡らして、膝の裏まで下りていく。

「うゝ……ッ、ふ、ッ、ぐ」

「うわ、跳ねてる。足の裏で分かる。……あははッ、はははッ！」
織田が机の上でのけ反って、声を出して笑った。

「まだ出てる。長いな。染み、すごいよ。腿まで色が変わってる」
粕谷のスラックスの前は、掌を広げたより大きく、黒く濡れていた。

三日ぶんの、濃い匂いが上がってくる。

膝が震えて、粕谷は織田のちんぽを握ったまま、左手を机の縁についた。

「……三日、抜いてねえんだ」

「は？」

「降りてから帰りが遅えんだよ、そんな暇があるか。それに歳だ。この歳で溜めると、締まりが利かなくなる。だいたい、織田課長の靴下が悪い。化繊だろ、それ。ざらついて擦れるんだ。綿ならこうはなってねえ。それと今日は昼を食ってない。樋口に渡す引き継ぎを書いてたら食いそびれた。腹に何も入ってないと踏ん張りが利かねえんだよ、男は。ふだんなら足ぐときで、ッ、こんな量が出るか」

織田は机の上で体を折って、目尻を指で拭った。

「はは、ツ、腹、痛い。靴下のせいで出した人、初めて見た」
濡れた足の裏を持ち上げて、自分の鼻へ近づける。

「くさ。濃いな。三日ぶんって匂いだ。……ほら、返す」

足の裏が、粕谷の腿の乾いた所で、ぐい、ぐいと拭われた。

「腿で、ツ、足を拭くな。裾の内側まで染みる」

「どうせクリーニングだろ。染みが一つ増えても同じだよ。……
で、俺のは。まだなんだけど」

織田のちんぽは粕谷の右手の中で、反ったまま、びくびくと待っている。

「……てめえで扱け」

「やだよ。あんたの手がいいって言ってるだろ。左、空いてるよな。両手使って。左は玉。下から持って」

粕谷は机にしていた左手を、織田の股へ入れた。

織田の金玉は締まって、付け根のすぐ下に上がっている。

粕谷の太い指なら、片手で二つとも包めてしまう。

「……っ、は。あったかい。そのまま、転がして。握るなよ、あんたの握力だと潰れる」

「卵よりは丁寧に持ってやってる」

「はは、ッ。怖いこと言う。……でも指は優しいんだよな、あんた。客にもそうだった」

右手で竿を扱いて、左手で玉を揉む。

くちゅ、ぬちゅ、くちゅ。

皮の厚い両手が、元部下の股の間で、唾と我慢汁にまみれて動いている。

その間も、織田の足はどかなかった。

濡れた靴下の裏が、出したばかりで生温かいスラックスの前を、また踏む。

ぐちゅ。

「ぐ、ツ、踏むな、今は、ツ、んゝ」

「中、ぐちゃぐちゃだ。音するよ。聞こえる？」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぬちゅ。

自分のザーメンの中で、縮みかけたちんぽがこね回される。

出したばかりの亀頭は、布が擦れるだけで腰が抜けそうになる。

「ツ、ふ、う、……染みに、なる、ツ、だろうが、ウールだぞ」

「手遅れだよ。裾まで色が変わってる。手、速く。……そう、それ。付け根から、ぎゅって」

織田の足の指が、濡れた布ごと亀頭をつまんで、くい、と引っぱった。

「んゝッ、……っ、く、そこを、つまむな、出した、後だぞ」

「なのに、また芯が入ってきてる。元気だな、溜めてた人は」

粕谷は腹立ちまぎれに、手首を使って扱き上げた。

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ。

織田の腹が、シャツの下で固く締まる。

息が浅くなった。

「は、ッ、……っ、は。親指、亀頭の裏。……そこ。あんた、ほん

とに、手は、いいな」

「褒めて、ねえで、ッ、さっさと、終われ」

「もうすぐ。それまで、目、こっちに置いとけ。逸らしたら最初からな」

粕谷は織田の顔を睨んだ。

客の前では崩れない顔が、眉を寄せて、口を半分あけている。

「掌。上からかぶせて。机、汚すなよ。……あ、ッ、出る」

粕谷は左手を玉から離して、亀頭の上に掌を伏せた。

その掌の真ん中を、熱いのが打った。

びゅ、びゅる。

びゅく、びゅく。

「……っ、く、は」

織田の腰が机の上で跳ねて、足の裏が粕谷の前をぎゅう、と踏みしめる。

掌の窪みにザーメンが溜まって、指の間からあふれて、手首を伝った。

濃くて、重い。

粕谷のより、鼻に刺さる匂いにする。

「こぼすなよ。……ふ、ッ、まだ出る。握ってて。最後まで搾って」

粕谷は右手で、付け根から亀頭へ、ゆっくり一度だけ絞り上げた。

とろ、と残りが掌に足された。

織田は長く息を吐いて、足をやっと下ろした。

「……はー。出た出た」

「出しすぎだ。袖に入った。カフスの中までだぞ」

「あんたほどじゃないよ。腿まで濡らした人に言われたくない」

織田は机から下りて、自分のちんぽを下着へしまった。

ファスナーを上げる音がする。

粕谷は、両手を腹の前に浮かせたまま立っていた。

右手は唾と我慢汁で、左手はザーメンで、どこにも触れない。

「拭けよ。ハンカチ、持ってるだろ。上着の胸のポケット。あんな、いつもそこだ」

「……よく見てるな」

「四年ね。あんたが客の前で汗を拭くの、いつも左手だった」

粕谷はましなほうの右手の小指で、胸ポケットから白いハンカチを引っ張り出した。

左の掌を拭う。

指の股、手首、カフスの内側。

白い布が、ぐっしりと重くなった。

「畳んで。戻して。同じポケット」

「濡れたのを、胸に入れろってのか」

「あんたのだろ、それ。持って帰れよ。中身は俺のだけど」

粕谷は濡れた面を内側にして畳み、胸ポケットへ押しこんだ。

シャツの上から、左の胸が冷たくなる。

織田は脱いだ革靴に足を入れて、顔をしかめた。

「うわ、靴の中まで冷たい。あんたのせいだからな、これ」
鍵が開いた。

「見積、続きやつといて。帰るときは内線な」

織田は机の紙を伏せたまま置いて、先に出ていった。

粕谷は上着の前を合わせて、下まで全部ボタンを留めた。

それでも、腿の染みは裾から覗く。

下着の中でザーメンが冷えて、歩くたびに金玉が腿に貼りついた。

面談室を出た所で、ラジオの音がした。

ナイター競馬の実況だ。

「あれ、粕谷課長。まだいたの。遅くまでご苦労さん」

守衛の丸山が、鍵束を腰で鳴らしながら立っていた。

粕谷より頭一つ半低い所から、痩せた顔が見上げてくる。

「丸山さん。見積が残ってましてね」

「月曜から残業かい。偉いねえ。俺はあと二レースで上がりだ」

丸山はラジオの音を少し下げた。

「……何かこぼした？」

丸山は鼻をひくつかせて、面談室の中を覗いた。

「漂白剤みたいな匂いするね。換気扇、回しとくよ」

「……蛍光灯も一本、切れかけてますよ。安西さんが明日替えるそうです」

「ああ、脚立ね。地下だって、さっきも言ったのに」

丸山は壁のスイッチを押して、粕谷の上着の裾のあたりを一度だけ見た。

それから何も言わずに、ラジオと一緒に廊下を曲がっていった。

十時。

粕谷は自分の席で、見積の最後の行を打ち終えた。

スラックスの前は乾いて、板のように固く突っ張っている。

胸のハンカチは、まだ湿っていた。

帰るには、内線を入れなければならない。

粕谷は受話器を取った。

課長席は十歩先で、パーティションの上に織田の頭が見えてくる。

「……織田課長。上がるぞ」

受話器の中と、十歩先から、同じ声が二重に聞こえた。

「おつかれ、粕谷さん。課長、は付けなくていいよ。二人のときは」

「……」

「明日、ハンカチは替えてこいよ」

粕谷は受話器を置いた。

置いた、というより叩きつけた。

がちゃん。

音がフロアに響いて、パーティションの向こうで、織田が声を出して笑った。

第2話 評定の欄

「粕谷さん、これ当たると思います?」

水曜、夜の八時。

向かいの席から樋口が身を乗り出して、スマートフォンを粕谷の机の上へ突き出してきた。

ライブの抽選の申し込み画面だ。

「彼女に言われたんすよ。外れたら俺のせいになるんで。今日も見積の差し戻しを食らって、定時に出そこねたし」

「日頃の行いだな。お前、人の机の菓子を黙って食うだろ」

「あ、これ貰います」

樋口は粕谷の机の煎餅を一枚取って、鞆を肩に掛けた。

「お先です」

ぱり、という音がエレベーターのほうへ遠ざかっていく。

フロアに残ったのは、粕谷と、窓際の課長席の織田だけになった。

粕谷は顔を上げずに、見積の続きを打った。

革靴の音が近づいてきて、椅子の後ろで止まる。

背もたれに掛けた上着が、持ち上げられた。

「替えてきた？ ……紺か。月曜の白いのは」

織田が上着の胸ポケットを指でひらいて、中を覗いている。

「スラックスと一緒にクリーニングだ。受付の婆さんに、何の染みですかと聞かれた」

「何て答えたの」

「ヨーグルトだ」

織田が上着を背もたれへ落として、噴き出した。

「はは、ッ。三日ぶんのヨーグルト」

笑いながら、紙を一枚、粕谷のキーボードの上に置いた。

「期中評価。本人に見せて話せてさ、人事が」

粕谷の名前の下に、欄が五つ並んでいる。

協調性の欄は、Bだった。

織田は胸のペンを抜いて、粕谷の目の前で、BをCに書き直した。

「理由。報告の遅れ。火曜の日報、出たのが今朝だ」

「客先から直帰だ。朝いちで出すと、先に言っている」

「うん、聞いた。でも遅れは遅れ」

ペンの先は、まだ紙の上にある。

「上げたいなら、俺の機嫌を取れよ。あんた、客の機嫌は取れるだろ」

このCが人事へ上がれば、客先を持たせてもらえなくなる。

粕谷は椅子を回して、織田を見上げた。

「……織田課長」

「課長は付けなくていいって」

「なら、お前だ。お前な、評価の紙を私用で書き換えて、寝つきが悪くならねえのか」

織田は目を丸くして、それから肩を揺らした。

「はは、ッ。『お前』。昇格して二週間で、そこまで落ちたよ、俺」

織田は機嫌のいい顔で、椅子の背を掴んだ。

「夜はぐっすりだよ。……どけよ。今日は俺がここ」

粕谷が立つと、織田は入れ替わりに粕谷の椅子へ座った。

粕谷の椅子に沈むと、織田の爪先は床に届かない。

「高いな、あんたの椅子。足が浮く」

ぷしゅ、とレバーが引かれて、座面が沈んだ。

「下。机の下、入って。膝ついて」

「……俺の肩が通る幅か、これが」

「斜めにすれば入るって。ほら」

粕谷は机の縁に手をかけて、膝を折った。

ごん。

頭が天板の裏に当たった。

「ッ、……くそ」

「くく、ッ、いい音。でかいんだから、首すくめろよ」

机の下は暗くて、埃とカーペットの匂いがする。

肩が左右の板につかえて、背中を丸めないと収まらない。

目の前に、織田の膝がある。

「ファスナーだけ下ろして。あんたの、出しといて。脱がなくていい」

「……出して、どうする。風邪をひかせる気か」

「机の下で仕舞ってたら、俺の靴が暇だろ」

粕谷はスラックスのファスナーを下ろして、下着の前からちんぽを引き出した。

まだ柔らかい。

皮を半分かぶったまま、重たく下を向いている。

「お、やっと顔を出した。……太いね。寝てても、俺の手首くらいある」

「見たら仕舞うぞ。カーペットの埃が付く」

「まだ何もしてないだろ。これからだよ」

頭の上で、引き出しの開く音がした。

「あ、輪ゴム。箱ごとあるじゃん」

「おい、人の引き出しを」

「いいのがあった。……皮、かぶってるな。自分で剥いて。的が隠れてる」

織田は箱の中を、がさがさと探っている。

「輪ゴムで、何を束ねる気だ」

「いいから。指で、付け根のほうへ引いて」

粕谷は親指と人差し指で、自分の皮を後ろへ引いた。

ぬる、とめくれて、丸い亀頭が机の下の暗がりに出る。

「でかい先っぽ。色、濃いな。そのまま持ってて。動くなよ」
ぱちっ。

「痛ッ」

右の腿の内側に、細い痛みが走った。

「外した。動いたろ、今」

織田は椅子を少し後ろへ引いて、背を丸めて机の下を覗きこんでいる。

人差し指に輪ゴムを掛けて、親指で引いて、片目をつぶった。

ぱちん。

「ぐ、ッ」

今度は竿の真ん中、皮を引いている指のすぐ先だ。

手の中で、ちんぽがぶるん、と揺れた。

「当たった。揺れた揺れた。重いから、揺れ方が遅い」

「ガキの遊びだ。……備品だぞ、それは」

「あんたの引き出しのдар。あんたに返してるんだよ」

ぱちっ。

「んゝ」

シャツの上から、左の乳首を打たれた。

布ごしでも、針で刺されたように痛い。

「お、乳首。今、肩が跳ねた。……もう一つ、右」

ぱちっ。

「ッ、ふ、……狙いが、下手だ。腿だの、脇だの」

「今のは乳首の真横。寄せてるんだよ、わざと」

ぱちっ。

「ぐ、ツ」

右の乳首の真上だった。

じん、と痺れて、そのあとから熱くなる。

「立った。シャツの上から分かる。豆みたいだ。でかい的だな、あんたの乳首」

「弾いて、遊びてえなら、ツ、祭りに行け」

「夜店の的は、当てても起き上がってこないからね。……下、でかくなってきた」

粕谷は自分の股を見た。

輪ゴムを当てられるたびに血が入って、ちんぽが起きている。

太った竿が、机の下から織田の膝のほうへ伸びていく。

皮を引いている指を、亀頭の張りが内側から押し返してくる。

「ふは、的がでかくなった。輪ゴムで硬くなる人、いるんだ」

「……輪ゴムが、もったいねえ。総務に、何て言って貰う気だ」

「書類が増えた、でいいだろ。先っぽ、もう濡れてる。糸、引いてるよ。カーペットまで。手、どけて。亀頭に当てる」

粕谷の指が離れても、皮はもう戻らなかった。

「待て、そこは、」

織田は輪ゴムを引いて、よく狙った。

ぱちっ。

「うゝッ、……っ、く」

むき出しの亀頭の、くびれのすぐ上だった。

腰が跳ねて、頭がまた天板に当たる。

ごん。

「真ん中。赤い点がついた。……汁が飛んだよ、今。俺の靴まで」

「うゝッ、……亀頭は、やめろ、ッ、皮のねえ所だぞ」

「だから狙うんだろ。跳ねたとき、いちばんいい顔した」

外れた輪ゴムが、粕谷の膝のまわりに散らばっている。

椅子の車輪が鳴って、織田の膝が粕谷の肩の両脇まで戻ってきた。

織田は指に残った一本を手首に掛けて、自分のファスナーを下ろした。

じ、という音が、粕谷の鼻の先でした。

反ったちんぽが出てきて、亀頭が粕谷の唇の前で止まる。

「口。開けて」

「……歯が当たっても、文句を言うなよ。やった事がねえんだ」
「一回も？」

織田の笑いが、口の途中で止まった。

「あるわけねえだろ」

「……そっか。じゃあ教える。四年ぶんの礼だ。舌、出して。亀頭の裏から」

粕谷は舌を出して、亀頭の裏に当てた。

しょっぱい。

汗と、小便の残りの味がする。

「そう。そのまま、ぐるっと。……は、ッ。ひげが玉に刺さる。いいよ、口に入れて」

唇をひらいて、亀頭をくわえた。

張り出したくびれが、歯の内側をこすって入ってくる。

顎が外れそうなくらい、口がいっぱいになった。

「んゝぐ」

「歯、当たってる。唇で包んで。……そう。上手い上手い。目、上。啜えたまま、こっち見ろ」

粕谷は眉を寄せて、上目で織田を睨んだ。

「その顔。口はちんぽでいっぱいなのに、目だけは、客先で俺を叱った時のまんまだ。……いいよ。逸らすなよ」

織田の両手が、粕谷の後頭部に回った。

短い髪を掴まれて、ぐい、と引き寄せられる。

ぬぷ。

反った竿が上顎をこすって、亀頭が喉の手前まで来た。

「ご、ッ、……んゝんゝ」

「吐くなよ。鼻で息して。右手は自分の。扱いてろ。左手は俺の腿」
粕谷は左手を織田の腿に置いて、右手で自分のちんぽを握った。
我慢汁で、付け根までぬるぬるしている。

くちゅ。

「んゝ……ッ、ふ」

「あ、今、喉が動いた。自分のを握ると締まるんだ。……続けて」
織田の両手が、粕谷の頭を前後に動かす。

ぬぷ、ぬぷ、ぐぽ。

唇の端から涎があふれて、顎を伝って、扱いている自分の手の甲に落ちた。

ぐぼ、ぬぷ、ぐぼ。

「今日さ、課長会議が二時間だよ。部長がプロジェクターを繋ぐだけで二十分。俺、その間ずっと立って線を持ってた」

ぐぼ、と喉が鳴る上で、ペンを回す音がしている。

「誰も俺の顔なんか見てない。壁の画面を見てる。あんたもだよ。昨日も今日も、一回もこっちを見なかったろ」

「んゝぐゝんゝッ」

「返事是要らない。口は使ってろ。……鼻、俺の毛に付けろ」

両手が頭を押さえつけた。

ぐぽ。

亀頭が喉の奥に嵌まって、粕谷の鼻が織田の毛に埋まる。

「ご、ッ、……ん、ん、ッ」

息が止まる。

涙がにじんで、喉がひくひく締まった。

「……っ、は。締まる。奥、あったかい。あんたの喉、太いから全部入る」

頭を引かれて、粕谷は鼻から息を吸った。

涎が糸になって、亀頭と唇の間に垂れる。

また押しこまれる。

ぐぽ、ぐぽ、ごちゅ。

粕谷の右手は、頭を振られる速さに合わせて速くなっていた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

「手、離すぞ。抜くなよ。自分で奥まで啜えてろ」

後頭部から手が消えた。

織田は手首の輪ゴムを指に掛け直して、机の下へ腕を伸ばした。

背を丸めて、粕谷の肩の横から、胸のほうへ指を向ける。

ぱちっ。

「んッ」

左の乳首だ。

打たれた瞬間に、喉がぎゅっと締まった。

「当たった。喉、締まったな。……これ、いいな。輪ゴムを当てると、あんたの口が吸いついてくる」

ぱちっ。

「んゝぐ、ッ」

今度は扱っている手の上から、亀頭の横。

痛いのに、手の中のちんぽがびくん、と太くなる。

「あんた、痛いと硬くなるんだ。へえ。……今ので汁が垂れた。啞えたまま、鼻で唸って」

粕谷は咥えたまま、織田を下から睨んだ。

その時、エレベーターの着く音がした。

ちん。

織田は椅子ごと前へ出て、机の奥まで膝を入れた。

粕谷の頭は、織田の腹と天板の間に挟まれる。

亀頭が喉の奥に嵌まったまま、抜けなくなつた。

「んゝ……ッ」

「静かに」

足音が、通路を近づいてくる。

「あれ、課長。まだいたんすか」

樋口の声だ。

「……そこ、粕谷さんの席ですよね」

「借りてる。粕谷さんはトイレ。どうした、忘れ物か」

織田の両手は天板の上で、ペンを回している。

「充電器、忘れました。その白いやつです。タップに挿さってるの」

粕谷の左の耳に、何かが触れた。

天板の奥の隙間から垂れている、白いコードの先だ。

それが、ずる、と上へ引かれて、耳の縁をこすっていく。

「ッ……」

喉が締まって、織田の腿がぴくりと動いた。

「ほら、これ。……ライブ、申し込めたのか」

「いけました。取れたら有休下さいね。平日なんで」

「取らぬ狸だな。当たってから言え」

樋口はコードを手に巻きながら、まだ立っている。

「あと課長、粕谷さんに言っというて下さい。引き継ぎの三枚目、字が小さくて読めないって」

机の下で、粕谷の喉が低く鳴った。

「ん」

「……何か鳴りました？」

「俺の腹。晩飯がまだなんだ」

織田の革靴の先が、机の下で動いた。

膝をついた粕谷の股へ入ってきて、スラックスの上から金玉をと
ん、と持ち上げる。

握ったままの右手の中で、ちんぽが跳ねた。

我慢汁が、カーペットへ糸を引いて落ちる。

口では息ができない。

鼻の穴を広げて、織田の毛の匂いごと空気を吸う。

「この煎餅、貰っていいっすかね。粕谷さんですけど」

「本人に聞けよ」

「いないんで」

ぱり。

「粕谷さん、長いっすね。電話でも持って入ったんすかね」

「さあ。客からだろ。あの人、便所でも客には出るから」

革靴の先が、金玉の下をぐり、とこねた。

粕谷の鼻から、ふ、ツ、と息が漏れる。

「じゃ、お先です。課長も早く帰ったほうがいいっすよ。腹、すごい音してました」

足音が遠ざかる。

エレベーターの扉が閉まる音がした。

織田は椅子を後ろへ引いて、机の下を覗きこんだ。

「ふは、ツ、……あんた、今、喉で怒ったろ。『字が小さい』で」

「んゝぐ、んゝんゝツ」

「何言ってるか分かんない。……あんたの金玉、樋口がいる間じゅう、俺の靴の上で上がったり下りたりしてたよ。『字が小さい』のとこが、いちばん跳ねた。あんた、腹が立つと硬くなるのか」

粕谷は啜えたまま、織田の腿に爪を立てた。

「んゝツ、んゝんゝ」

「痛い痛い。怒るなって。手、動かしていいよ。啜えたまま、出せ。目はこっち」

粕谷の右手が動いた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ。

涎と我慢汁でぐしょ濡れの竿を、太い指が付け根から亀頭まで扱き上げる。

口の中では、織田のちんぽが舌の上で脈を打っている。

——くそ。出る。

「んゝぐ、……うゝッ」

びゅる、と手の中から飛んだ。

びゅく、びゅる、びゅく。

膝の前のカーペットに、白いのがぼた、ぼたと落ちていく。

腰が前へ出て、咥えたままの喉が、織田の亀頭を何度も絞った。

「……っ、は、すご。喉がうねってる。出しながら吸ってるよ、あんた」

織田は背を丸めて、床を見た。

革靴の先で、カーペットの上を指す。

「はは、はははッ。飛んだなあ。ここ。ここも。俺の靴の横まで来てる。量が多いんだよ、あんたは。金玉がでかいだけある」

「んゝーッ、んゝ」

「分かった分かった。次は俺の番」

両手が、粕谷の頭を掴み直した。

今度は加減がなかった。

ごちゅ、ごちゅ、ごちゅ。

喉の奥を、亀頭が続けざまに叩く。

「ご、ッ、んゝ、ご、ぶ、ッ」

鼻水と涎が一緒に垂れて、粕谷のシャツの胸に染みていく。

出したばかりのちんぽが、ファスナーの間でぶらぶら揺れて、織田の靴に当たった。

「は、ッ、……っ、は。あんたの口、でかくて、いい。喉、ひらいとけ。こぼすなよ、俺の椅子じゃないけど」

ごちゅ、ごちゅ、ぐぽ。

「飲め、ッ、……は、全部」

頭を腹に押しつけられた。

喉の奥で、ちんぽが膨らんだ。

びゅ、びゅる。

熱いのが、喉に直に流しこまれる。

「んゝぐ、…ご、く、ッ」

飲まないと息ができない。

ごく。

ごく、ごく。

「は、…そう。飲んでる。喉、動いてる。もう一口。まだ出てる」

織田は最後に腰を二度ゆすって、ゆっくり抜いた。

ぬぽ。

「げほ、ッ、……ぶ、は、ッ」

「まだ。先っぽに残ってる。舌で取って」

亀頭の割れ目に、白い玉が一つ乗っている。

粕谷は咳を呑みこんで、舌の先でそれをすくった。

苦くて、喉に貼りつく。

「……濃いのを、ッ、出しやがる。水で割れ」

「原液で飲め。口。開けて。舌、見せて」

粕谷は咳きこみながら、口を開けて舌を出した。

織田が親指で下の唇を押さえて、中を覗く。

「残ってない。……えらいえらい。初めてにしちゃ、上出来だ」

「げほ、ッ、……このカーペットはな、毛が硬えんだ」

粕谷は机の下で、唇を手の甲で拭った。

「膝に刺さる。総務が安いのを入れるからだ。それとこの椅子。お前、勝手に下げたろ。下げると肘掛けが天板に当たって、俺の頭の逃げ場がねえんだよ。二回も打った。樋口もだ。充電器を人の島のタップに挿しっぱなしにして、コードを俺の耳に垂らしやがって。字が小さいだと。あれは読む気がねえんだ。先月までなら、俺の字が蟻みたいでも、目を細めて最後まで読んできたぞ、あいつは。あ

と輪ゴムだ。あれは去年の箱だ。古いのは伸びが悪くて、当たりが重い。弾くなら新しいのを開けろ。総務の棚に幾らでもある」

「はは、ツ、ははは。新しい箱ならいいんだ」

織田は椅子の上で、腹を押さえて笑った。

「……口が滑った。顎がだるいからだ」

「誰のせいだろうな。……で、床。それ、あんたのだろ。拭いて」

机の上から、ティッシュの箱が下ろされた。

粕谷は机の下から這い出して、カーペットに両手と両膝をついた。

ファスナーからちんぽを垂らしたまま、自分のザーメンにティッシュを当てる。

毛の間に入りこんで、押さえても取れない。

「取れねえ。……硬い毛のくせに、吸いこむのは早い」

「擦るなよ、広がるから。上から叩くんだ。唾で湿らせて」

粕谷は丸めたティッシュを睨んだ。

「染み抜きまで、お前に習うのか、俺は」

「一人暮らしが長いんだよ。染みなら俺のほうが上手い」

革靴の先が、後ろから尻をつついた。

とん。

「ッ、靴か」

「尻が通路にはみ出てる。でかいから。……もつと右。まだ白いのがある」

とん、とん。

四つん這いの尻を、靴の先が右へ左へ押す。

「蹴るな。革靴の先は、固えんだ」

「靴で教えてやってんだ。そこ。輪ゴムも拾って。全部」

粕谷は唾とザーメンで濡れたティッシュを丸めて、散らばった輪ゴムを一本ずつ拾った。

机の下、椅子の脚の間、樋口の席の手前。

尻を上げて這い回る後ろで、織田がずっと笑っている。

「そこ、椅子の車輪の裏にも一本。……あんたさ、這ってても背中が広いな。机の下、よく入ったよ」

「押しこんだのは、お前だ。次は、てめえの机でやれ」

「あっちは窓際だよ。あんたの尻、通里から丸見えになるけど」

拾った輪ゴムを箱に戻すと、織田はペンを取った。

評価の紙のCに線を引いて、横にBと書き直す。

「遅れは無かったことにしとく。……口のほうは、Aを付けてやりたいけどな。欄が無い」

紙を粕谷のキーボードの上に置いて、織田はファスナーを上げた。

「椅子、返すよ。あったまってる」

革靴の音が、課長席へ戻っていった。

粕谷は膝のカーペットの毛を払って、ちんぽをしまった。

顎の付け根が、口を閉じるだけでだるい。

亀頭の赤い点に下着が擦れて、ひり、とした。

翌朝、木曜の八時二十分。

粕谷は席に着いて、すぐに腰を浮かせた。

椅子が低い。

織田の高さのままで。

粕谷はレバーを引いて、座面を元へ戻した。

足元のカーペットに、輪ゴムが一本落ちている。

拾い残した。

「おはようございます」

樋口が出勤してきて、粕谷の指先を見た。

「粕谷さん、それ、要らないなら下さい。弁当の蓋が浮くんで」

粕谷は輪ゴムを指に掛けたまま、渡さなかった。

課長席で、織田が受話器を耳に当てたまま、こっちを見ている。

空いた手の指を二本立てて、輪ゴムを飛ばす真似をした。

粕谷は輪ゴムを自分の引き出しに放りこんだ。

閉めた引き出しの中で、箱の輪ゴムがざらりと鳴った。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 降格課長、元部下の課長に人事の紙で押さえられ、机の下
で啜えさせられ面談室でナカに出される

サークル タビユーへ

発行日 2026・10・8

レーティング R18